

新型コロナウイルスと子ども

「新型コロナウイルスと子ども」特集に寄せて

コロナ禍で見直す 子どもに優しい社会 (チャイルドケアリングデザイン)

榊原洋一 (日本子ども学会編集委員会 委員長)

抵抗力のない子どもは、これまで常に感染症の最大の犠牲者でした。世界全体で見ると、その状態はまだ続いています。ワクチンの開発によって防ぐことができるために、日本では大きな社会的関心の的になっていないありふれた麻疹（はしか）ですら、いまだに世界中の子どもを苦しめ、命を奪っています。WHOによると近年の1年間の麻疹患者数は3000万人、死亡数は88万人にのぼります。

ありふれた風邪を起こすコロナウイルスの変種（COVID-19）が、中国の一都市から始まった昨年末に、それが世界中を巻き込むパンデミックになると思った人はおそらくいなかったでしょう。それが今では全世界で2700万人が感染し、死亡者は奇しくも麻疹と同様に88万人に達しています。

新型コロナウイルス感染症は、これまでのところ子どもには感染者が少なく、また子どもでは死亡者も少ないという、麻疹とは全く対照的な、大人に厳しい感染症です。子どもはある意味で守られている、と考えたくなりますが、世界中の大人の生活や社会のあり方が大きく変わることによって、子どもたちの生活も、大人の都合が先行して大きく変わってしまいました。

小林登先生が唱えておられた日本子ども学会の使命の一つに、「子どもに優しい社会を作る（チャイルドケアリングデザイン）」があります。

学会誌『チャイルドサイエンス』の20号は、子どもとCOVID-19をテーマに特集を組むことによって、小林先生のご意志に応えたいと思います。